

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：32633

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23792672

研究課題名(和文) 多文化共生社会に望まれる外国人ケアを習得するための周産期看護師教育プログラム

研究課題名(英文) Educational transcultural nursing program for perinatal nursing staffs in the multicultural society

研究代表者

五十嵐 ゆかり (IGARASHI, Yukari)

聖路加国際大学・看護学部・准教授

研究者番号：30363849

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、看護師が様々な背景を持つ対象に対応できる「多文化共生社会に望まれる外国人ケアを習得するための周産期看護師教育プログラム」を開発することである。研究方法は、第1段階；基礎調査の分析と国内調査、第2段階；海外調査、第3段階；プログラム試作開発と評価検討、第4段階；プログラムの修正で行った。結果、言語や文化の違いを考慮した上で、適切なコミュニケーションができることに注目した試作プログラムを作成した。周産期領域だけではなく、外国人医療の課題の解決のための汎用性のあるプログラムの開発を行った。今回は評価までは至らなかったため、今後検討を重ねて評価を行うことが今後の課題である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop educational transcultural nursing program for perinatal nursing staffs in the multicultural society. Firstly fundamental data was collected and analyzed, and secondly I visited healthcare facilities where immigrant women were cared in Japan and abroad. Thirdly the pilot educational program was developed and considered instrumental to evaluate this program. Then pilot educational program was revised. As the result of this study, an educational program for health care staffs was developed. This educational program is focused on not only verbal communication but also non-verbal communication and communication manner. We considered that this program should be carefully selected and provided for nursing staffs and students.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：多文化共生 外国人 周産期 教育プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

2009年の外国人登録者数は2,186,121人であり、我が国総人口の1.71%であった。父母いずれかが外国人の場合の出生数は、1995年に2万件を超えてから一定件数を維持し、2009年は22,511件を示した。このように外国人が家族を形成して社会の一員となりつつあり、出産が増加しているが、実際に外国人にケアを提供している臨床現場では課題が多いのが実状である。

外国人医療における課題は、竹田(2010)の分類を参考にすると、(1)言語・コミュニケーションの違い、(2)情報不足(文化慣習、医社会経済、医療制度の違い)の2つに大別される。これらの課題が根底となり、ケアを提供する看護者側は、外国人に対する説明や指導の不十分さ、異文化に対する苦手意識や無関心な態度、などによる関係の希薄さ、あるいはステレオタイプな観念によって、ケアの質の低下をもたらしている(林ら、2002;新實ら、2004)。このケアの質の低下が、特に産科領域においては外国人妊産褥婦の健康障害を引き起こし、切迫流産や妊娠貧血などへ内服ミスによる症状悪化、説明・理解不足による妊婦定期未受診、緊急時のインフォームドコンセント不足によるトラブル、産褥期の育児支援の不足からのマタニティブルーの発症、といった状態を招き、母子が危険な状況に陥ることも多々ある(小笠原、2004;井上ら2005)。そして、本来、女性にとって貴重なライフイベントである出産が、看護者との言語・コミュニケーションや情報不足の障壁から、孤独感・疎外感を助長する辛い体験となってしまう(藤原、2007)。

代表者の五十嵐(旧姓:藤原)は、これらの外国人医療の現状から2004年~2005年に「異文化からの人々への妊娠・出産・産褥に対する文化を考慮したケアモデルの開発」(若手研究B)という課題で助成をうけ、看護者のケアの困難感を解決するためのケアツールの開発として、6つの産科のケア場面を抽出し、多言語のパンフレットを作成した。パンフレットは、中国語、タイ語、タガログ語、スペイン語、英語、日本語を約3万部配布し、外国人に非常に喜ばれたと同時に、医療関係者から有効なりソースであったとフィードバックをもらっている。その後、2006年に多文化医療サービス研究会(RASC)を立ち上げ、パンフレットの改定を行い、現在9言語(英語・中国語・韓国語・タガログ語・タイ語・ベトナム語・フランス語・ポルトガル語・ドイツ語)で産科の情報小冊子を全国に無料提供している。全国数か所の病院施設や自治体で使用されており、現在

も紙媒体の情報小冊子の必要性は継続している。

また、ケアにおける多言語サポートの選択肢を増やすため、2007年~2008年に「ユビキタスIP-TEL産科医療通訳システムの開発」(萌芽研究;研究代表者、堀内成子)に、研究協力者として研究に参加し、産科における電話通訳の構築の検討に貢献した。さらに、2009年の聖路加看護大学の博士学位論文で、「在住外国人女性が評価する出産ケアの質 多文化共生社会における文化を考慮したケアの発展に向けて」を課題とし、研究をまとめた。対象者は、日本人女性568名、外国人女性236名で主な出身国は、日本、中国、ブラジル、フィリピン、韓国であった。その結果、外国人女性は、言語・コミュニケーションの障壁を軽減する支援や通訳サービスの構築も必要としていたが、それ以上に、同じ言語を話すことよりも自分を患者として尊重する看護者を切望していた。つまり、外国人の受け入れ側である看護者の態度が課題であることが浮き彫りとなる結果を得た。さらに、出身国別に文化的背景を反映した日本人女性とは異なるニーズやケアに対する評価の違いも把握することができた。

一方、外国人支援への政策に目を転じると、歴史的に多民族な諸外国においては、外国人支援とともに受け入れ側の課題の解決にも先駆的に取り組んでいる。たとえば、オーストラリアのMulticultural center for women's health(MCH)は、移民女性のリプロダクティブヘルスに注目し、政府から助成を受けて医療者に定期的なセミナーを開催し、啓蒙活動を行っている。またEU加盟国の中の12病院が協力し、移民者の健康保持・増進のためMigrant Friendly Hospitals project(MFH;移民に優しい病院プロジェクト)が施行され、医療者向けのトレーニングも行われている。さらにMHFでは、母子保健を強化するプログラムも焦点化されており、外国人の周産期におけるケアが重要であることは国際的にも明らかである。そのほか看護教育における異文化看護の科目や病院施設における卒後教育で異文化をもつ患者への対応について学ぶ機会を提供している。

日本においては、国レベルでの外国人母子への支援は未だ具体的な取り組みがないのが実状であるため、同様に、看護者への支援体制も整備されていない。たとえば、看護の基礎教育で国内の外国人に注目した看護を学ぶ科目もなく、外国人集住地区であっても病院施設の卒後教育で外国人母子保健についての知識提供を行っている施設も認められ

ない。NPO/NGOの活動は、外国人当事者への支援でさえ十分とはいえず、看護師への支援活動までは眼が向けられていない。

このように日本においては、看護師への支援体制が整備されていないため、外国人へのケア提供は、当惑が強く至難な看護となっており、問題が山積しているのが現実である。そのため医療における外国人対応の教育は、喫緊の課題であるといえる。

外国人医療において、外国人当事者への支援と同時に、受け入れ側の準備がなければ、医療における課題は解決が困難であることは容易に想像が出来る。そこで本研究は、これまで注目されず準備不足であった「外国人の受け入れ側（看護師）の体制作り」の課題の解決のために取り組むこととした。

## 2. 研究の目的

本研究は、看護師が様々な背景を持つ対象に対応できる「多文化共生社会に望まれる外国人ケアを習得するための周産期看護師教育プログラム」を開発することである。

## 3. 研究の方法

### (1)2011 年度

基礎調査の分析と国内外の調査を行う。海外調査では、(オーストラリア)で先駆的に支援を行っている団体のプログラムに参加し、学ぶ。

### (2)2012 年度

海外調査で(ヨーロッパ)での支援の状況と使用しているプログラムを学ぶ。教育プログラム試作開発し、その評価の検討を行う。

### (3)2013 年度

パイロットテストを行い、教育プログラムの修正を行う。

## 4. 研究成果

### (1) 2011 年度

#### 国内調査

複数の病院施設から外国人ケアを経験したことのある看護師に会議を重ね、問題の抽出やケアの改善点について話し合い、プログラム提供の時期や可能性について検討を重ねた。

#### 海外調査

オーストラリアのメルボルンにある団体を訪問し、プログラムに参加した。提供しているプログラムの使用許可をもらった。また、共同研

究の可能性を議論した。

### (2) 2012 年度

#### 海外調査

地理的に移民の出入国が多く、さらに支援を行っているヨーロッパ諸国の病院や関係施設を訪問した。デンマークでは、オーデンセにあるオーデンセ病院の医師や看護師と会議を重ねた。また法的な支援を学ぶために、移民局を訪問した。イタリアでは、フィレンツェのカレッジ病院において、看護師向けに提供されている異文化看護コースの一部に参加し、プログラムを学んだ。

教育プログラムパイロット版の作成  
調査内容を受け、実現可能なプログラムを検討した。

### (3) 2013 年度

11月に「外国人患者に出会っても困らない！言葉が違っててもケアはできる！」のワークショップの企画を行い、参加者のアンケート結果を教育プログラムパイロット版の作成に反映させた。

言語や文化の違いを考慮したうえで、適切なコミュニケーションができることに注目した外国人ケアを習得するための試作プログラムを作成した。

・全3セクション(1,2は講義、3は演習)

当初は周産期看護師に注目した内容で計画していたが、2013年11月のワークショップでのアンケートから、周産期領域だけではなく、外国人医療の中での課題の解決のためのプログラムと広くとらえ、汎用性のあるプログラムの開発を行った。今回は評価までは至らなかったため、今後検討を重ねて評価を行うことが今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

Yukari Igarashi, Shigeko Horiuchi, and Sarah E. Potter(2013)Immigrant's Experience of Maternity care in Japan, Journal of community health, vol38, Issue4, 781-790、査読有

〔学会発表〕(計0件)

なし

〔図書〕(計0件)

なし

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

なし

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

五十嵐 ゆかり (IGARASHI Yukari)  
聖路加国際大学・看護学部・准教授

研究者番号：30363849